

房総沖のゆっくり地震について（続報）

前回のニュースレターで、房総半島沖のゆっくり地震（スロースリップ）についてお知らせしましたが、GPSが実用化される前からの各種データと合わせてみますと、1971年、1977年、1983年、1990年、1996年5月、2002年10月、2007年8月、2011年10月、そして2014年1月となります。

その間隔は6年-6年-7年-6年-6年-5年-4年-3年となります。最後の2回(2011年10月と今回の2014年1月)は、311の影響を受けたとは考えられます。しかしながら発生間隔がつかまってきている事、311の影響としても房総沖には大きな歪が蓄積されている事は確実です。

これとは別に房総半島沖では、千葉県東方沖の地震と呼ばれるM6.5前後の地震が繰り返し発生しています。一番最近では1987年のM6.7というのがあります。その前には1950年にM6.3、1912年にM6.2が発生しています。上記3個の間隔は、38年および37年でした。これとスロースリップとの関係ですが、スロースリップが6回発生すると被害の出るM6.5クラスの地震がこの地域で発生するとも考えられます。1987年から現在まで、まだ27年にしかありませんが311の影響でスロースリップが加速し、**すでに6回分の歪の蓄積が完了**したとも考えられます。

まとめますと房総沖ではM6.5クラスの地震の発生およびM8クラスの地震発生の準備がかなり進んでいるという事だと思えます。

ダイオウイカ報道

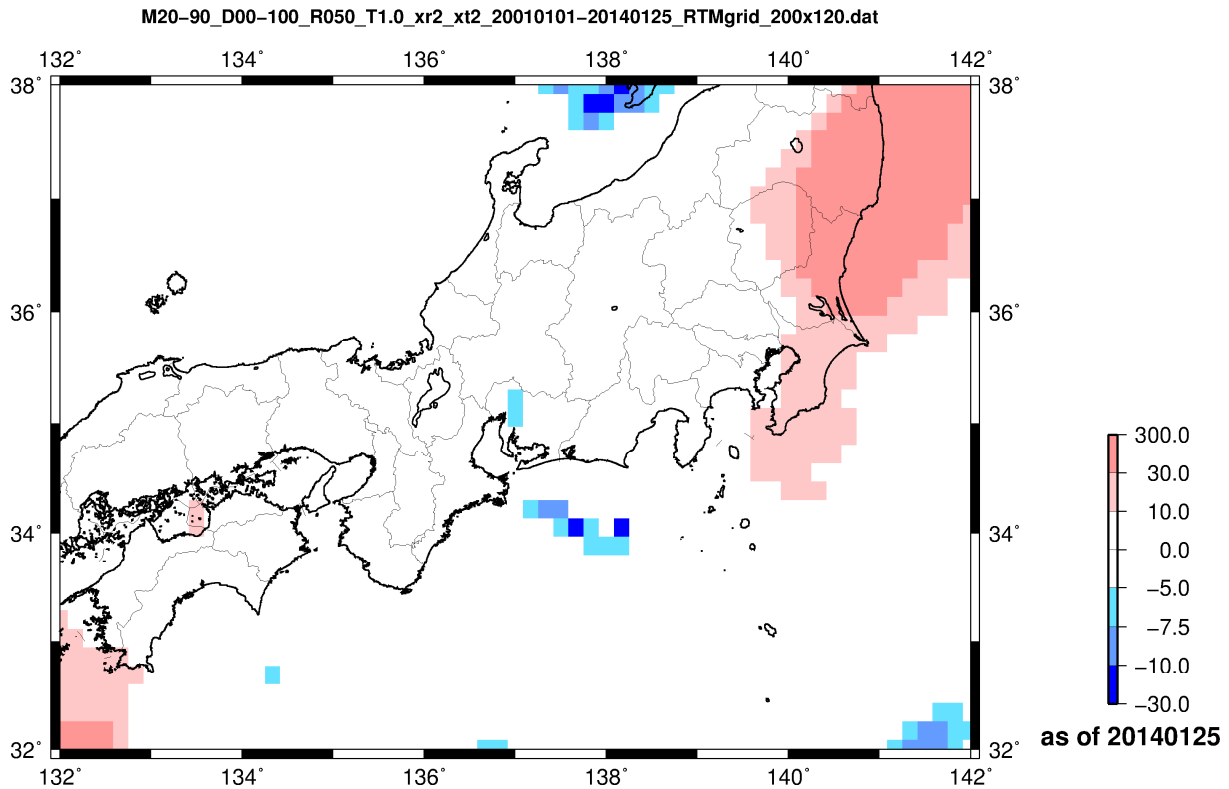
今年に入り、日本海側の各地でダイオウイカに関連する報道が数多くなされ、地震との関連でコメントを求められる事が多くなっています。確かに今年に入って「生きたダイオウイカが網に入っていた」等、過去に例のない状況がありますが、実は2006年には、日本海側で年間6件のダイオウイカの打ち上げが報告されています。

昨年、国立科学博物館で開催されたダイオウイカ展やNHKの特別番組もあり、メディアがダイオウイカに注目しているため記事が多くなっているのか、本当にダイオウイカの打ち上げ等が増えているのか、地震の前兆と考える前にこのような社会的な状況変化を考える必要があります。

一般にダイオウイカやリュウグウノツカイ等の深海生物が浅い所で目撃される原因として、水質の変化（特に日本海側では汚染物質の流入）や、水温の変化などが考えられます。それらの影響を評価したあとに地震との関連性を疑うべきと考えています。

東海地方、関西地方の地下天気図

下の図は1月25日時点での地下天気図です。この図では東海地方、関西地方をターゲットとして解析しています（首都圏および東北の精度は低い）。



上の図を見る限り、現時点で顕著な異常は存在していないのですが、少し前の地下天気図と見比べると、近畿地方に出ていた青色の領域が消えてきているのがおわかりになると思います。

下の図は13年9月（右下）と13年12月（下）の地下天気図です。鳥取県から琵琶湖周辺の青い領域が消えたのがわかります。もともとの静穏化の領域（面積）が小さかったので、非常に深刻な事になる可能性は低いと考えています。

